



# JSHCT Letter No.30

The Japan Society for Hematopoietic Cell Transplantation

有限責任中間法人日本造血細胞移植学会

March 2008

発刊発行:有限責任中間法人日本造血細胞移植学会 発行責任者:小寺 良尚(理事長) 編集責任:有限責任中間法人日本造血細胞移植学会編集委員会 発行:2008年3月  
〒461-0047 名古屋市東区大幸南一丁目1番20号 名古屋大学大幸医療センター内 TEL(052)719-1824 FAX(052)719-1828 http://www.jshct.com

## 第30回 総会を終えて

第30回総会 会長 平岡 諦

第30回という節目に当たり、従来と異なるプログラム編成を試みました。不安がありましたでしたが、応募演題443題、参加者数2,481名という、盛会裡に総会を終える事ができました。これは、ひとえに会員、非会員の皆様方のご支援の賜物と感謝しています。会場へのアクセス、昼食、その他、不行き届きな点が多々あったと存じますが、ご容赦ください。

今回の抄録集に「第一回骨髄移植臨床懇話会記録」の全文を掲載しました。御目にとまりましたでしょうか。今回の抄録集を保存していただき、第一回、第30回、そして5年、10年後の総会内容と、比較していただくのも一興かと存じます。

第30回という節目に当たり、少しスケールを大きく取って、総会の主題を「次世代骨髄移植」と「基盤整備」としました。プログラム編成を考えながら、2007年2月の2007 BMT Tandem Meeting (Keystone, Colorado, USA)、3月のEBMT (Lyon, France)に参加して、それぞれからプログラム編成のキッカケとなる情報を得ることが出来ました。

EBMTの会場では「European approach for the medical management of mass radiation exposure」(EBMT, Ulm University (Germany), IRSN (Institut de Radioprotection et de Su"rete' Nucleaire France)による共同作成)というリーフレットが配られていました。ちなみに会場となったフランスは原子力発電依存率(2001年75%)で世界一です。リーフレット作成者の中に「M. Akashi」というお名前を発見しました。帰国後すぐに放射線医学総合研究所の明石真言先生に連絡を取り、ご本人であることを確認すると共に、作成の経緯を総会でお話し頂くようお願いしました。これがシンポジウム2「急性期被曝障害のマネジメント」の始まりでした。東海村JCO事故当時から正岡徹先生を通じて明石先生を存じ上げていたと云う偶然がありました。

まだまだ偶然是重なります。骨髄移植の原点である「TBI」を総会の主題に沿ってどの様に取り上げようかと悩んでいました。たまたま、シンポジウム2の内容として、東海村JCO事故被害者の移植経過の報告を入れたく、東大医科研の症例について高橋聡先生

に電話をしました。高橋先生はその当時は医科研におられず、主治医をされた大井淳先生にお願い頂けることになりました。その電話の最後に、高橋先生から信じられない言葉が発せられました。「これまで一度もないので、TBIを取り上げてもらえないか」と。世界のトップランナーはさすがに目の付け所が違うなと思うとともに、すぐに取りまとめをお願いしました。これがシンポジウム1「TBIの現状と工夫」の始まりでした。

2007 BMT Tandem Meetingでは、二つの偶然に巡り会いました。一つは、Dr. Horowitzの「Evolution of clinical research in HCT」と題したMortimer M. Bortin Lectureです。Dr. Bortinはアメリカの骨髄移植登録生みの親であり、現在の国際的な登録一元化に繋がっています。彼の下で育てられたDr. Horowitzは、講演の始めに彼をprofessional fatherと紹介し涙ぐむ程に、気合いの入った、鳥肌の立つ素晴らしい講演でした。講演後にはstanding ovationが起きました。講演を聞かれた原田実根先生から「総会に彼女を呼んだら」と声をかけられましたが、すでに招待することは心の中で決めていました。正式な講演依頼時には、「登録一元化」や「臨床研究支援のための登録」の話だけでなく、もう一つの偶然のことについても話してもらうように頼みました。その偶然とは、Medical Directors Conference「Quality Outcomes Reporting: Getting Ready for HRSA's New Requirements」をたまたま聞いたことです。タイトルのQuality、Outcomesに惹かれて一寸立ち寄ったのですが、アメリカの大変な動きを知ることが出来ました。全例、前登録、医療保険に関連づけた強制的登録制度をその年の4月から開始するというものでした。これまでのような臨床研究支援だけではない登録制度がアメリカで動き始めようとしていたのです。その登録制度のいわば元締めがDr. Horowitzを中心としたCIBMTRでした。日本でも学会主導で、quality assuranceを目指した認定制度が必要と常々考えていたので、米国の新しい流れを含むDr. Horowitzの特別講演、続く熱田由子先生(2007年夏、Dr. Horowitzの誘いでシアトルに滞在)の講演、さらに新認定制度の議論へと続く「公開討論会」を設けることとしました。総会準備中に医師法21条をめぐる大変な医療状況になってきました。そこで、上昌広先生に緊急情報発信をお願いしました。

ある先生からは、「学会のテーマ、方向性がはっきりしており、いかにも先生らしいとてもスマートな学会でした。」とお褒めの言葉を頂くことが出来ました。しかし、このようなプログラム編成を好ましく思われなかった先生も大勢おられたかも知れません。第30回の節目と云うことでご容赦ください。

学会が「さらなる発展に向けて」突き進んで行くことを願い、第30回総会閉会のご挨拶とさせていただきます。ありがとうございました。

# 平成19年度総会承認事項等のお知らせ

第30回日本造血細胞移植学会総会の前日に開催された理事会、評議員会・社員総会において以下について審議、決定、承認され、平成19年度総会(平成20年3月1日)に報告されました。

## I. 事業並びに会計についての承認事項は以下のようです。

平成19年度事業中間報告並びに平成20年度事業計画について審議され、決定・承認されました。

一般会計：平成19年度中間・収支実績について報告され、平成20年度収支予算について承認されました。  
特別会計(①同種末梢血幹細胞ドナーフォローアップ調査事業②血縁造血幹細胞ドナー事前登録フォローアップ事業③データ管理一元化事業)：平成19年度中間・収支実績について報告され、平成20年度収支予算について承認されました。

(ご覧になりたい方は事務局までお申出ください。)

## II. 平成20年度からの役員として以下の方々が選任並びに信任されました。

1. 新理事(10名)：(内科系理事)岡本真一郎、笠井正晴、高橋 聡、谷口修一、豊嶋崇徳、宮村耕一、(小児科系理事)加藤剛二、辻浩一郎、(基礎系理事)鈴木律朗、(その他・看護系)近藤咲子

継続理事(10名)：(内科系理事)今村雅寛、坂巻 壽、高上洋一、谷本光音、中尾眞二、(小児科系理事)加藤俊一、小島勢二、土田昌宏、(基礎系理事)藺田精昭、(その他・看護系)荒木光子

2. 新評議員(16名)：(内科系)池亀和博、石川 淳、河野彰夫、田野崎隆二、友成 章、長藤宏司、福田隆浩、松井利充、宮腰重三郎、宮崎泰司、吉田 均、(小児科系)菊地 陽、坂田尚己、(その他・看護系)近藤美紀、中林明子、藤澤めぐみ

継続評議員(152名)：ご氏名は、学会ホームページをご参照ください。

3. 次々次期会長(平成22年度・第33回学術集會会長)：原 雅道(愛媛県立中央病院)

4. 名誉会員：浅野茂隆、小寺良尚

尚、次々期会長(平成21年度・第32回学術集會会長)：小島勢二(名古屋大学大学院医学系研究科)につきましても、昨年度既に決定しております。

## III. 関連他学会との連携について

日本移植学会、日本輸血・細胞治療学会、日本アフェレシス学会、日本組織移植学会、日本再生医療学会等について今後連携していくことが審議され、決定・承認されました。

## IV. 以下の議題について理事会並びに評議員会・社員総会で審議され、継続して審議されることとなりました。

造血細胞移植登録一元管理委員会 規約(案)並びにデータの管理と利用に関する細則(案)：データの管理と利用に関する細則(案)については今後更に検討することを前提に委員会規約(案)が承認されました。  
定款施行細則並びに理事評議員選任規約(細則)：理事の選出方法(社員総会での直接投票から郵送での投票への変更)について審議され、改定されることとなりました。

## 《平成20年度・第31回日本造血細胞移植学会総会について》

会長：笠井正晴 会期：平成21年(2009年)2月5日(木)2月6日(金)

会場：ロイトン札幌、札幌市教育文化会館、北海道厚生年金会館

## ◆総会会期中の各種委員会の活動について

以下の委員会が開催されました。各委員会の担当審議事項について記載いたします。

在り方委員会：一般社団法人への移行と定款細則の改定について

臨床研究委員会：学会が主導/支援する臨床研究の広報と活性化について議論し、その1案としてのEBMTのようなWorking Partyの設置について意見交換を行った。

認定・専門医制度委員会：認定専門医制度に関するアンケート結果(中間報告)について

看護部会：委員長の交代と平成20年度の活動計画について

ガイドライン委員会：予防接種ガイドラインおよびGVHDガイドラインの委員会案について

編集委員会：新たに、造血幹細胞移植に関する重要文献の紹介コーナーを設けることが提案された。

日本造血細胞移植推進機構：平成19年度会計報告、中間・収支実績報告、平成20年度収支予算(案)について審議、決定・承認され、平成19年度総会(平成20年3月1日)において報告されました。

(敬称略、50音順)

# 認定・専門医制度に関するアンケートのまとめと中間報告

認定・専門医制度委員会委員長  
中尾 眞二

認定・専門医制度委員会は平成20年1月より、全医師会員を対象として認定・専門医制度に関するアンケート調査を開始しました。ここでは2月15日時点で得られた回答のまとめを中間報告としてご紹介します。アンケートは1,903人の医師に発送され、143人(8%)から回答が得られました。各設問に対する回答のまとめと代表的な意見は以下のようです。

## 1. 専門医制度を設けることについてどう思いますか？

賛成42%、条件付賛成19%、反対38%、条件付反対1%

<賛成意見>

- ・移植医療の標準化・安全性確保のために血液学会専門医とは別の専門医制度が必要。
- ・施設認定だけなら専門医転出後も移植が可能であるため、専門医も認定する必要がある。

<反対意見>

- ・個人の能力のみで移植医療の質は担保できない。
- ・専門医資格があると、訴訟リスクが却って高まる可能性あり、危険な医療行為(移植)を敬遠する施設が増える。
- ・血液学会専門医があるため不要。

## 2. 施設認定を行うことについてどう思いますか？

賛成63%、条件付賛成20%、反対17%

## 3. 専門医制度が出来たときに専門医の資格を取りたいと思いますか？

はい49%(制度化されれば取得を目指すと思う)、いいえ27%、その他24%

## 4. 「カリキュラム案」・「規則案」に対する意見

- ・試案でシミュレーションすると何施設が認定施設になるかを学会で調査してほしい。
- ・指導医の論文要件が厳しすぎるため、臨床に重点をおく施設が認定施設になれない。

専門医制度を設けるかどうかは今後の学会の方向性を決める非常に重要な問題ですので、認定・専門医制度委員会では少なくとも50%以上の医師会員から意見を聞く必要があると考えています。このため、電子メールによるアンケートの回答期限を4月末に延長し、さらに多くの会員に意見を求めることにしました。

アンケートの設問は本学会ホームページに掲載されています。この設問をメールにコピー・ペーストしていただき、回答を加えて学会事務局アンケート専用アドレス [jshct-opinion@med.nagoya-u.ac.jp](mailto:jshct-opinion@med.nagoya-u.ac.jp)宛にお送りください。回答結果のサマリーは本年5月末までに会員専用ホームページに公開する予定です。また、この結果を元に、認定・専門医制度を発足させるか否かが本年6月の臨時理事会で議論されることになっています。皆様のご協力をお願いいたします。

## 施設紹介

# 市立函館病院

政氏 伸夫

市立函館病院は、万延元年(1860年)に「箱館医学所」として創立された北海道初の官立病院で、現在、21診療科、総病床734床、一般病床598床を有する渡島、檜山の住民、約50万人の基幹病院です。1981年には救命救急センター、1994年には地方センター病院に認定されています。創立140年目の2000年10月に函館山中腹から現在地に新病院を移転・新築するにあたり、造血幹細胞移植医療を立ち上げることが計画されました。現在、内科病棟は6階東側に位置して、クラス100無菌室3室、クラス10000無菌病室8室を含めて、42床です。無菌病室の窓からは、函館山に続く裏夜景が見渡せ、夏には函館港の花火も見ることができます。

政氏は1998年4月に赴任しましたが、当時、南北海道には、同種移植を実施できる施設は無く、移植患者は特急で4時間を要する札幌あるいは東京の病院への転院が必要でした。札幌や東京の医療機関に代わって、当院に移植適応患者を紹介して頂き、しかもスタッフが十分な自信を持って医療を行うためには、スタッフも納得できる形で安全性の根拠を、出来るだけ持つことが必要と考えました。



臨床検査科および輸血・細胞治療センターのスタッフに、造血幹細胞採取・冷凍保存および評価・培養システムの立ち上げを担当してもらい、地元の産科医院にも協力を仰ぎ、臍帯血の分離・処理・凍結・解凍・評価を行いました。TBIに関しては、照射室は十分に広く5mのSADが確保できます。移動照射の必要がなく平行光線に近いため、均一でむらのない照射と正確なシールドや補正をおこなうことも可能です。手術室スタッフは、ドナーに優しい骨髄採取プロトコルの作成して頂きました。無菌看護プロトコルは、看護スタッフが栄養科スタッフや薬局スタッフの協力のもとに作成してくれました。当院のクラス100ユニットはホルマリン蒸薫やオゾン滅菌は行えない設計で簡易化プロトコルが前提でしたが、最初の10例の移植は、薬浴、TVN内服、ファンギゾン・バンコマイシン・トブラシン吸入、ガウンテクニックによる入室等、可能な限りオーソドックスな移植・無菌管理プロトコルで行いました。確

実に移植経過・結果を評価でき、もしも不調な成績が続いた場合でも、立ち戻るべき基礎となるようにとの考慮からです。

当院最初の同種間骨髄移植は、2001年8月2日に施行され、無事生着を得ました。2002年3月6日には3例目の同種移植を末梢血幹細胞で施行しました。2004年10月には日本さい帯血バンクネットワークの移植医療機関に登録され、2005年1月には骨髄バンクの採取施設および移植診療科として認定を受け南北海道地区唯一、北海道全体で6番目のバンク認定施設となりました。2008年2月末までに24例の同種移植と11例の自家移植を行いました。地域の人口状況を反映して、患者平均年齢は、同種移植では46.2歳、自家移植では51歳と高齢者が多いことが特徴です。最近、造血幹細胞移植の臨床上必要な検査、細胞処理、測定・評価は、VNTR等のキメリズム解析を除いて、ほとんど院内で可能となるように関連設備も整備されましたが、これらの機器・システムの運用・管理は、全てが医師以外のスタッフの手で行われており、3人の医師をサポートしてくれています。移植医療に関わっている現在のスタッフの集合写真を掲載して、施設紹介に代えたいと思います。



## 会員の声

### シアトル、そしてトーマス博士への想い

自治医科大学附属病院 無菌治療部／血液科 森 政樹

2004年12月6日サンディエゴで開かれたASHでの出来事。講演を少しでも近くで聞こうと中央2列目に陣取った私の目に、写真でしか見た事の無かったE.D. Thomas博士の姿が飛び込んできたのは開始15分前のことであった。圧倒的な存在感で周囲の参加者に拍手と握手で迎えられたノーベル賞受賞者の柔和な表情に魅入られた私は、そこが米国であるという気安さも手伝って、氏の前に進み出て握手を求めるといった思い切った行動に出してしまったのである。「私は日本の血液学者で、シアトルに短期留学し、移植を学ばせて頂きました。」「ほー、それはいつのことなのですか。」そんな他愛ない会話とたった1枚のスナップ写真が私の手元に残されただけであったが、出会いの不思議さとその場の強烈な印象とがいつまでも心の奥底に残り、帰国後の診療活動の大きな原動力となったことを今でも鮮明に覚えている。そもそも、そんな偶然のタイミングで有名人に出会ってしまった幸運と、気後れせずに直接話しかけてしまった自身の度胸の良さと、一緒に写真撮影まで御願ひしてしまったことがやはり非礼ではなかったかとの少しばかりの後悔の念と、様々な感慨が一度に押し寄せてきてしまい、その時はかなり興奮もしたが、今も机の前に貼ってある氏と並んで緊張の面持ちで写真に収まっている自分をあらためて見直して見るとき、そこには何かこれを大きな転機として造血幹細胞移植の世界で踏ん張っていくぞ、との決意も読み取れて、日々の業務で一喜一憂する現在の自分の原点がそこにあるようにも思えてならない。ワシントン大学メディカルセンターでの短期留学中には幾度となく、Thomas博士の肖像とその偉業への讃辞を目にしてきた。複数の専門家によって手厚い診療が提供される米国の徹底されたチーム医療と、医者も看護師もコメディカルも孤軍奮闘に近い日本のチーム医療との違いに違和感を覚えた事もあったが、2004年9月にクラス100が4床、クラス10000が4床の新しい無菌治療病棟が開棟して以来、日本でもチーム医療が実践できることを強く願ひ、実績を積み重ねていく間にそれを体感する事でいつしかその溝を感じなくなっていったのも、また事実である。私自身の中でも憧れの対象から尊敬すべき先人へと想いが切り変わっていった事が、現場で闘ってきた我々無菌治療部の成長の証なのかもしれない。自治医大にも、造血幹細胞移植を巡る諸問題に対して、妊孕性保護への取り組み、難治性GVHD治療へのMMFの導入など、進取の気性を持って積極的に働きかけてきたという学風がある。当時は全くの未知の世界であった移植医療に取り組みされた若き日のThomas博士とシアトルグループの熱意と行動力に少しでも近づきたいと願ひ、今日も患者と向き合っている。

#### ガイドライン委員会からのお知らせ

この度ガイドライン委員会におきましては「造血細胞移植後の予防接種ガイドライン(案)」および「GVHDガイドライン(案)」を作成致しましたので本学会のホームページ上に公開させていただきました。つきましては皆様に御意見をいただきたいと思っておりますのでホームページにアクセスされ、両ガイドライン(案)に対する御意見をメールにて学会事務局にお送りくださるようお願い申し上げます。

日本造血細胞移植学会ガイドライン委員長 加藤剛二

#### ● 年会費について

平成19年度の会計年度は平成20年3月31日までとなっております。年会費のお払込がまだお済みでない方はお早めにお願ひ致します。尚、先号でもお知らせしておりますように、平成20年度から事業年度が変更されます。平成20年度につきましては、移行期間として平成20年4月1日から平成20年12月31日までとなります。年会費につきましても同様となりますので、ご留意ください。

#### ● ご連絡先の変更について

ご異動等に伴いご連絡先に変更がございましたら、事務局までお知らせください。 【事務局より】